

—文化財NEWS速報—

“砂利骨様、隅田川を渡る”



砂利骨様（大倉秀之氏撮影）

皆さんには“砂利骨様”というのを存じでしようか。かつて汐入り（南千住8丁目）にあった石仏で、戦後、その行方はようとして知れませんでしたが、先日、長年汐入の風景を写真に撮っている大倉秀之氏（台東区在住）のご教示により汐入の対岸、足立区関屋で大同造船所を営む高林清氏の所にあるらしいということが分かったのです。

高田善仁氏の『私達の汐入』（昭和18年）によると、今から20年ほど前、汐入の寄洲という土地に高田甚兵衛氏が、一面の砂地でしばしば白骨が出土したり、水流の関係で水死体が漂着するこの地に保元寺（台東区）より授かった石仏を安置して死者を弔いました。その石仏を後に村人達が“砂利骨様”と呼ぶようになったということです。それ以来、毎年お盆には線香を供えたとい

ます。川と共に暮らす汐入の人々の姿がうかがえるようです。

汐入寄洲という所は、隅田川が大きく曲がり終わり、流れが緩やかになる部分の内側にあたる砂嘴でした。江戸時代にも川を浚った際に多くの頭骨が出たという記事があります。

石仏は造船所の敷地の中、お稲荷様の裏手にひつそりと立っていました。全高49センチ、地蔵像の右側に「櫻残童子靈位」と彫られ、子供の墓塔の様にも見えます。残念ながら、お顔の半分と左側部分が破損して、像の詳細は不明です。今後も調査が必要でしょう。

大同造船（旧高林造船）はかつて汐入にありました。高林清氏のお話によると、戦争の折、空襲によって造船所が破壊され、戦後間もなく現在地に移りました。その際に石仏も移し、破損も空襲の為だということです。清氏の先代（勇太郎氏）が修復し、あらためてお祀りしたとのことです。氏自身は「先代が信心深かつたから」と言われます。

ます。川と共に暮らす汐入の人々の姿がうかがえるようです。

皆さんにはもんじや焼きを食べたことがありますか？もんじやという不思議な言葉、食感はどこから来たのでしょうか。現在区内にはもんじや焼きのお店がたくさんあり、荒川区をはじめ下町と呼ばれる地域の特色のひとつになりつつあります。

皆さんにはもんじや焼きを食べたことがありますか？もんじやという不思議な言葉、食感はどこから来たのでしょうか。現在区内にはもんじや焼きのお店がたくさんあり、荒川区をはじめ下町と呼ばれる地域の特色のひとつになりつつあります。

もんじや焼きの起源は、江戸時代の屋台や縁日にみられた「文字焼き屋」に遡ります。昭和30年代に花開いたといわれる駄菓子屋は学校や集合住宅、商店街といった子ども達が多くいる場所にありました。駄菓子屋に足繁く通い駄菓子を買ったり、親に内緒でもんじやを食べたり、という思い出をお持ちの方も多くいるようです。こうした子どもの溜まり場、遊び場などの様子を戦後から昭和30年代を中心に紹介していきます。また、もんじや焼きを食べたり、懐かしい遊びができるイベントもあります。ぜひお越しください。

汐入は年来の開発で大きく姿を変容させました。かつての町並は消え、わずかに残る路地の跡が無くなるのも間もなくでしょう。しかし町の歴史や文化はわずかではあっても綿々と続いているのです。

荒川ふるさと
文化館だより

川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL 03(3807)9234
登録(13)0025-01号

▶予告!!
平成13年度企画展
「遊戯の食
～もんじやの世界と懐かしの風景～」

開催期間

「遊戯の食～もんじやの世界と懐かしの風景～」

平成13年10月20日(土)～11月25日(日)
イベント／10月27日(土)・28日(日)

午前10時より

（八代和香子）

弥永浩二

（仮）川との暮らし川への思い
平成13年12月8日(土)～14年2月10日(日)

動物たちがゆく②

病は牛から

小塚原は回向院下屋敷、刑場のあつた場所。ここは明治の初め、牛を焼くところ、とされました。

バーベキューをしろ、というのではありません。ここに「焼捨場」を設けたから、今後は病死の牛馬羊豚、路傍の犬猫の死骸を運んで「片付」けよ、というのです。決して人が食べる事がないように…

意味においては、①はうなずけますが、②・③はいかがでしょうか。触つても感染してしまうような流行病とは一体どういったものなのでしょうか。

当時の日本に肉食が普及したことはよく知られています。その様子を描いた著名な作品、『安愚樂鍋』(仮名垣魯文、明治3・同5年)には、次のような一節があります。伝染病が流行し、広く世間に浸透した食牛の「功能」がなくなってしまったと「牛肉屋」の主人も肩を落としているが、「林涅爾李斯士」のように行きようがない、と。「今我人民肉食を欠いて不養生を為し、其生力を落す者少なからず。即ち一國の損なり」(肉食之説)

時は明治5年(一八七二)、東京府から市中に触れ知らされました。この目的とするところは、「病死禽獸之肉ヲ販売」しないようにする点でした。「人身之健康ヲ害スル」からだそうです。ではなぜこうした肉が売られる「健康」を害するのでしょうか。もう少し詳しくみておきましょう。

病死禽獸ヲ食料ノ為致賣候ハ兼テ嚴禁ニ候處、天然老死或ハ尋常ノ病ニ斃候モノハ皮剥取、骨肉等田園ノ培養ニ相成候モノハ相用不苦候条、於各地方右弁別、厚ク可致注意候事但、流行病死ノ者ハ燒捨勿論ニ候事(中略)

右之通被仰出候間、市在区々無済可触知者也

明治六年三月四日

東京府知事 大久保一翁

ここでは動物は一般に①食用品、②皮革、③肥料、として商品化されていくよ

うです。そこで病死のものをそういうルートから外そう、というのがこの触れの趣旨で、「流行病死ノ者ハ」「勿論」「焼捨」てるべきものとなっています。その意味においては、①はうなずけますが、②・③はいかがでしょうか。触つても感染してしまうような流行病とは一体どういったものなのでしょうか。

小塚原の刑場で焼かれた牛。つまるところ、決して食べること、そして触れる事のできないよう、焼却されたのでした。流行病に冒された牛などは人間の病気の原因とされたのです。動物にとつてはなんとも迷惑な話だったでしょうが、これは昨今人々を騒がせている狂牛病を考えれば現代とそうかけ離れたことでもあります。人間にとつて切実な問題だったはずです。普及していく肉食のなかで、「清浄」を保つ装置=場所として、刑場は社会の裏側でそれを支えたのでした。同時に「不淨」なものが集積・処理される場所、という「説明」がここで新たに刑場の地に付け加えられたのでした。

(龜川泰照)

参考引用文献 『史料集明治初期被差別部落』、『明治文化全集』20・21巻、「目で見るくすりの博物誌」



内藤記念くすり博物館所蔵

焼捨てる以外に、「病根を断こと」はできなかったのです。だから「勿論」「焼捨」るべきものだったのです。

小塚原の刑場で焼かれた牛。つまるところ、決して食べること、そして触れる事のできないよう、焼却されたのでした。

参考引用文献 『史料集明治初期被差別部落』、『明治文化全集』20・21巻、「目で見るくすりの博物誌」

あらかわの公園計画

歴史には、実現されなかつた事象が存在する。これらは表面には表れないし、語られることも少ない。だが、そこに当時の人びとの理想や願いを垣間見ることができる。

「道灌山」石浜神社「素盞雄神社」には共通する歴史があった。遊園一つまり公園計画。あらかわにも、「日比谷公園」があったかもしだれないのである。

今から測ること110年余り。東京には市区改正という大きな目標があった。簡単にいって、西欧諸国に先進都市に倣つて東京を整備しようとしたのだ。紆余曲折を経て、明治21年8月、東京市区改正条例公布。道路、鉄道、公園、墓地など多岐に渡る内容だった。しかしこの時点では、あらかわの公園計画は存在していない。翌22年にかけての市区改正委員会議上で浮上するのである。先の3つの内、一部は他の計画と一緒に同22年5月告示、一部は告示に至らなかつた。

では、3つの公園計画中、一番大規模な「道灌山公園」から見ていく。公園の範囲について、3つの公園中一番議論がかわされた。整備費用が余りかかるないだろうと、日暮里村一円を公園に編入することまで考えられていました。結局範囲は、「北豊島郡日暮里村諏訪神社妙隆寺修性寺青雲寺及字北久保ノ内 面積凡一萬三千八百坪」に決定。道灌山の他に、寺町であるひぐらしの里(現在の浄光寺、本行寺、青雲寺、修性院一帯)と諏訪台(諏訪方神社一帯)が含まれていた。現在の西日暮里3、4丁目にほぼ該当する。明治21年10月に計画案に浮上し、上記のよつた議論の結果、同22年に告示された。

石浜神社―市区改正条例でいうところの「真崎公園」も、21年10月に計画案に載せられ、さしたる議論もそれぬまま、22年告示。範囲は「北豊島郡真崎神社及石浜神社面積凡一千三百坪」。現在の南千住

地名のつやき

②尾久の遠吠え編



江戸名所花曆（荒川ふるさと文化館所蔵）

「場面某地名辞典の編纂委員会顔合わせで」
アッ恐縮です「秋葉原さん」ですね。
「名刺を差し出しながら」

失礼いたしました。私こういうもの

です。いえ、「尾久」と書いて、「おぐ」

といいます。JRの尾久駅が「おく」だか

ら、「おく」が正しいんじやないかって。

おつしやいますねえ。私のまわりには、

東尾久とか、西尾久という名前の親類も

いるんです。

JRは元国鉄、国が決めたんだから、

「おく」が正しいって。あなたねえ、國

の権威で、物事の是非を判断するつてい

うのは、いかがなものかな。

私は、尾久駅が開設された昭和4年

よりも、ずっと前から尾久を名乗ってき

たんだから。えっ、それならいつ頃から

かって。話せば長くなりますよ。

——尾久・秋葉原のみにスポット——

我が家の言い伝えによれば、鎌倉幕府の歴史をつづった「吾妻鏡」に「武藏国豊島庄犬食名」と見えるのが、我が家

の歴史の始まりだつていうんですよ。犬食は「いぬぐい」じゃないかって。無理もない話ですが、犬は大の書き間違いだつていうんです。大食は「おおぐい」と読み、それが「おぐ」となつた。やや強引

とも言えなくもないですがね。それにね、昔は「小貝」「越貝」などの漢字を当てたこともある。たとえば、鎌倉末から室町時代のころは、我が家は、あの鎌倉の鶴岡八幡宮の社領になつていたようなんです。それを伝える、応永6年（一三九九）の関東管領上杉朝宗さんの文書があるんですが、ここには「武藏国豊島郡小貝郷内江戸金曾木（彦欠カ）三郎跡」事」と書かれています。これを読んで、とんでもなく我が家は広かつたんだなア、と驚きましたよ。どうも、今の尾久だけでなく、田端のお山の東側から、金杉——今までいえ東日暮里・台東区根岸あたりまであつて、上野のお山に我が家敷地を通つて行けたつことです。

どうも、没落したのかだんだん敷地も狭くなつていった様子。江戸時代の初めの頃までは、「尾久」本家のみだつたのが、正保の検地（1644～1648）のころまでに「上尾久」「下尾久」「舟方」に別れてしましました。それぞれ独自の家風とでも申しましようか「土地柄」を持ち、「上尾久」などは、花好きで、華藏院（東尾久・8丁目）というお寺の西側に「佐治玄林牡丹屋敷」や原公園（町屋5丁目）のあたりに見事な桜草の自生地を抱えていました。地味にも富んで、白魚・鰯などは絶品でした。「上尾久」下尾久は仲良く「峠田領」に属しましたが、「船方」のみは、どうしたことか「岩淵領」。このあたりに後で「梶原堀之内」と縁組をする遠因があつたんでしょう。明治22年には、荒川遊園西側の堀の所で分けられて、一部が王子村大字船方（北区堀船）になつてしまつたよ。お上の都合で散り散りになつてしまふのは、どんなにつらいことか。

ところで、「秋葉原」さんはどちらの秋葉原さんで？ ああ、あの電気街の。つかぬことをお聞きしますが「あきばはら」火除地で火伏の秋葉神社がまつられています。原っぱだから「あきばっぱら」と呼ばれていたんですね。それが駅名になった時「あきはばら」となつたなんて、何とも私と境遇が似ているではありませんか。

——秋葉原の手を取つて——

いやいや、尾久駅が当時の滝野川町（北区上中里2丁目）に造られたことなどは、ここではおいておきましょう。大事なのは、私たちの名前です。私のこの悩みに共感し駅名改称運動をしてくれている人達もいるんですよ。ともに、聞いましょう、私たちの名前が子々孫々へと伝わるようになります。

舞台が明るくなる。辞典編纂委員長の明るい声——

「いやー、そちらのお二人さん、地名談義に花が咲いていますな。漏れ聞くに、なかなか示唆に富んだご意見。この地名辞典では「おく」「おく」両方で、項目を立てましよう。「おく」も既に70年の歴史があるのですから。

（野尻かおる）

注1 仁治2年（一二四二）4月25日条。

2 応永6年11月12日付上杉禪助（朝宗）施行状（北区史 資料編 古代中世1）90号文書。

3丁目の石浜神社や東京ガスの近辺にあたる。素盞雄神社は21年11月「千住天王即チ素盞雄神社面積九百拾五坪」と報告があつたが、賛成者が少なく告示には至らなかつた。何故これら3ヶ所が候補にあげられたのだろうか。市区改正条例で公園に決定された地域は、ほとんどが東京府下の主な神社や江戸以来の名所である。これは、あらかわにもあてはまる。

例えば道灌山は、秋田藩佐竹氏抱屋敷があり、庭園は聚楽園として有名だった。地続きのひぐらしの里や諫訪台は、人々の遊行地でもあつた。現に議事録の中でも眺望がよいから、という意見がでいる。真先も豆腐田樂で有名な茶屋があり、「夏越の祓い」の時には大勢の遊行客で賑わつた。素盞雄神社は「公園三編入為シテ適當ナル神社」として名があげられていた。

しかし、告示された「道灌山公園」も「真崎公園」も整備されることにはなかつた。コレラ対策の上水道整備や道路といった急を要する計画から着手されていったからだ。予算的な問題もあつた。明治36年3月、「速成計画」に切り替えられた市区改正条例から、「道灌山公園」も「真崎公園」もはずされてしまった。

実現しなかつた公園計画には「東京を理想の都市」という明治の官僚や財界人の思いがこめられていた。だが現実を前に理想はついえた。

その後、荒れ果てた「道灌山公園」の一部、字北久保には東京渡辺銀行の経営者である渡辺治右衛門によって田園都市が作られた。大正5年のことである。大勢の文化人たちが居住し、治右衛門の理想は実現した。だが、昭和2年の恐慌で渡辺銀行は倒産。昭和7年につけられた地名「日暮里渡辺町」が残り、その2年後に地名も消えた。

歴史を振り返れば、昔も今も変わらぬ人びとの思いがある。それは、歴史を見る面白さの一つでもある。

（加藤陽子）

（参考文献）『東京市区改正事業誌』、『東京市史稿』市街編・遊園編・藤森照信『明治の東京計画』など他

専門員は見た!(3)

目から鱗の拓本解読法

我々は、金属や石など堅いものに刻まれた文字や紋様を読み取る時に、「拓本」採取という調査方法をとる。この作業をすると、紙の地の部分は黒く、文字の部分が白く抜けて仕上がる。「拓本」採取を行うことは、文書の筆写や写真撮影と同じ段階、つまり金石に刻まれた文字の複写(コピー)を取ることなのである。

こんなとき拓本があつたらなアー虎閻師鍊さんの場合――この技術は、漢字文化の本家本元中国の唐代に始まるとされ、千年以上の歴史をもつ。日本にいつ伝来したのかはわからないが、鎌倉時代の末には拓本採取が行われたことが確認されている。それには、こんな話が残っているのだ。紹介しよう。

当時、日本仏教の略史『元亨釈書』(元亨2年成立)を書こうと意気込んでいた、京都東福寺(臨済宗東福寺派大本山)の虎閻師鍊さん。尊敬すべき唐僧義空さんの事跡を刻んだ「日本国首陀羅寺記」碑を調べるために東寺を訪れた。この碑は、羅城門(京都市南区唐橋羅城門町)にあつた。の脇に立っていたが、門が倒壊したときに、こなごなに碎け、残欠が東寺の講堂、東南の隅に置かれていると、伝え聞いたからだ。師鍊さんが義空さんとこだわりを持つのにこんな理由がある。義空さんは、平安初期に南宋禪をはじめて日本にもたらしたという、偉いお坊さままで、檀林皇后と呼ばれた嵯峨天皇の皇后橘智子のお覚えめでたく、檀林寺(京都尼五山、現廢寺)の開山に迎えられたのである。京都中搜せば、碑文の写しきらい

は、あるだろうと思ったが、期待は見事に裏切られた。資料があつたはずなのに、それを見る事ができない。しかし、どうしても知りたいという時勿論性格にもようをとる。この作業をすると、紙の部分に彫られた龍の紋様もくつきりと残り、楷書字体の文字も鮮明に見える(師鍊さんは实物の観察をしつかりしているのだ)。師鍊さんは、即断片の文字を拓本に採つて帰途についた。それからが大変、4つの拓本を上にしたり下にしたり、なんとか碑文の概要をつかんだように思えた。『義空伝』執筆にあたり、ここからが負けず嫌いの師鍊さんらしいところだが、こんな事を言っている。

今碑雖文句不^レ成。斑斑或見焉。
世^ニ所^レ伝不^レ徒然也。昔六^ニ居士有^レ
集固錄一千篇。周秦之碑刻多載^レ之。

況隋唐乎。惜乎此方乏^ニ好古^ニ君子一。
見^ニ殘碑一。予^ニ贊詞不^レ得^ニ不^レ似^ニ跋尾
一耳矣。

【新訂増補國史大系】元亨釈書 卷第六 義空伝

ようするに、師鍊さんの言い分はこのようである。碑の断片では、文章にはならないが、大方のところは理解した。伝え聞くところも、まんざら間違いでもないようだ。それについて、かの中国では、六^ニ居士(宋代の応陽修)が「集固錄」という大著を編纂し、周・秦ばかりか隋・唐の時代の碑文をもたくさん記録している。わが国に、古を愛しむような君子がいなかつばかりに、あの碑の全文を、私は見ることができないでいるのだ(まったく、義空さん

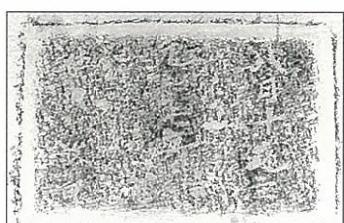
の項目は、あの碑の内容が頼りだったのに)。この本の編纂がきっかけで、残りの碑の断片が出現したら、私が書いた賛(ほめ文)調査の体験をそのまま贊にして『元亨釈書』卷第六 義空伝に載せたのだつた。

書のお手本から資料へ 師鍊さんが憧れた、中国の碑文拓本の収集は、皇帝の勅命によるものもあり、盛んに行われた。しかし、その目的は、能筆家が碑面に残した筆跡を、書のお手本とするためであり、碑文の内容よりも、むしろ文字の姿形に関心がある。つまり、觀賞用として集められたものなのだ。しかし、師鍊さんは、拓本を、歴史を書くための資料として求めた。金石文を調査研究の対象としている我々にとって、早くにこのような発想をもつた師鍊さんは、先駆的な歴史研究者として尊敬すべき御坊であつたといえるだろう。

しかし、師鍊さんがこの経験を元に『元亨釈書』編纂後、日本中の古碑を調査して歩いたという話は伝わっていない。もしそうであれば「日本国首陀羅寺記」など題した碑が立つてもよさそうなものだが……。

【目から鱗の】 当館では、現在「地域史講座」を開催している。区民が自らの手で調査・研究し、地域史を書くことを目指したものである。その中での、金石文に関する講座で、拓本の解説を宿題に出したところ、参加者Tさんがとても素敵な解説法を教えてくれた(写真)。我々は、というよりも筆者は、これまで拓本の解説にあたつては、縮小コピーを繰り返し、濃度を変えたりしながら解説を試みていた。

慎んでご冥福をお祈りいたします。



縮させていつて、
区別しようとい
うものである。

それでも、区
できることは、
多々あり、後は
長年の感とい
か、いくつもの
金石の拓本と実
物を見て、どれ
だけの事例が頭に入っているかがものをい
うという、職人じみた世界の中で解説し
てきたものだつた。筆者の経験の中でも、
比較的難解だと思われる拓本を課題に出
したものだつた。筆者によると、不思
議な紙が見えた。なんと、コピーの拓本の
文字がありそうな部分に、色鉛筆で黄色
が注してある。また、文字がどうか怪しい
部分には緑色が使われている。絵が趣味
だとは聞いていたが「いくら眺めていても
わからないので、色を塗つてみた」とは。
筆者が、あちこちの壁ばかりか、トイレの
壁にも貼つて、ウンウンいながら読んだ
のに、Tさんは数週間で読めてしまつた。
初心者なのになどとはいうまい。Tさん
も、筆者も、そして『元亨釈書』を著した師
鍊さんも、何が書いてあるか知りたいとい
うことにおいては、みな同じなのだから。
師鍊さんと、Tさんに畏敬の念を表し
つつ。合掌。

〔野尻かおる〕

記 報

荒川区登録無形文化財(金属彫

刻・昭和60年登録)保持者早川信
雄氏(74歳、南千住)は去る平成
12年10月3日に逝去されました。